



ワーキング・ガール

Working Girl

ステーシー・イン・ラブ 作

前橋梨乃 訳

ボブと僕は、二人で会社を興したばかりだった。

二人とも大学を出立でやる気にはあふれていたけど、後ろ盾になってくれる人なんていなかったから、その過程で恐ろしいほどの借金を背負い込んでいた。

だから、その4日間のビジネス・コンベンションへの参加費は、僕らにとっては大きな負担となった。

それでも、僕らは投資すべきだと決断したんだ。のるかそるか——始まったばかりの僕らのビジネスが、目の目を見るか破滅するかの勝負だと思っていた。

当然、飛行機に乗る予算なんてなかったから、車で長旅をし、なんとか前日に現地入りした。

数ヶ月前、このコンベンションへの参加登録をする時、宿泊費を節約しようとしたのは確かだ。だけど、それは、ツインルームでいいと考えていたわけで、まさかキングサイズのベッドがひとつだけの部屋だとは思っていなかった。

その部屋に入ると、大きなベッドの上に、コンベンション参加者向けの資料やあれこれのツールが並べられていた。

「ブライアン、その封筒とかをまとめてくれ。部屋を変えてもらいに行こう」

「ああ。……えっ!? マジかよ! ボブ、どうやら、それは無理みたいだ」

「ん? どうした？」

「これ、見てみろよ」

僕は、ツールのひとつを手にとって、ボブの目の前に差し出した。

「……えっ、マジかよ！」

ボブは、僕が言ったのと同じ言葉を繰り返した。その顔がさっと青ざめた。「どうして、こんなことになっちゃったんだ？」

僕が口にするのと、ボブは、それより少しだけ前向きなことを言った。

「これから、どうしたらいいんだ？」

どうやら、ダブルルームは、まちがいじゃなかったらしい。

参加登録の段階で「経費節減」にばかり気を取られ、僕らは「夫婦同伴」という項目を選んでいたようなのだ。

参加者用のネームプレートはたしかにふたつあり、ひとつは「Mr. ロバート・ジョーンズ」となっていたが、もうひとつは、ファーストネームをあとで書くよう空欄にしたまま、「Mrs. ・ジョーンズ」となっていた。

崩れ落ちるようにそのベッドに腰かけたボブは、そこにあった書類に目を

通すと、さらに落ち込んだ顔になった。

「これは、どうしようもないな」

そう言って、その書類を僕に差し出した。

「……えっ、なんてこった。こんな金、ないよ」

僕は、困惑して髪をかきむしっていた。

その書類によれば、僕らがあらためて二人の人間として登録し直すには、さらに1万7500ドル追加しなければならないのだ。そんな金は残っていない。

でも、だからといって、二人のうち一人だけで参加するというわけにもいかなかった。商談しなければならない相手は、あらゆる分野にわたり山のようにはいたし、一分の猶予もないほどのイベントの予定を二人で組んでいた。どちらか一人だけの参加では、いわば参加しないのと同じなのだ。

「わくわくしながらやってきたってのに、これで一卷の終わりってことか」

僕は、そう嘆きながら、なにか考え込んでいるボブの隣に腰掛けた。

「……ひとつだけ、方法がないわけじゃないけどな」

ボブは、どこか曖昧な顔で言った。

「でも、そんなこと、お前に押しつけるわけにもいかないし……」

「なんの、ことだ？」

僕は、藁にもすがる思いできいた。

「ブライアン、大学二年の時のハロウィン・パーティ、覚えてるか？」

ボブが言ったのはそれだけだったが、僕には、彼がなにを言いたいのかわかった。

あの時、僕らは寸前までパーティのことを忘れていて、仮装のための衣装を用意していなかった。で、当時つき合っていた女の子たちが、自分たちの

服でドレスアップしてくれたのだ。

といっても、それは、そんなたいしたもんじゃなかった。

だらっとしたロングスカートの下はジーパンをまくり上げたただけだったし、トップスも彼女たちのを借りたわけじゃなく、ふだん着ているシャツの下にとりあえずパッド入りのブラをつけたというだけだ。他の学年の時のパーティみたいに「衣装」に凝ったわけじゃなかったんだ。かつらもアクセサリもなし、すね毛丸出しで……要するにひどい格好だった。

化粧にしても、ボブはちょっと口紅を塗っただけだった。

ただ、僕の彼女は、僕にもう少しいろんなことをした。口紅、アイライン、アイシャドー、マスカラ……、それらは僕を、僕が思っていたのよりずっと女っぽくした。小柄で華奢な体とヘア

バンドのせいかな、僕は、それだけでけっこうかわいく見えたのだ（まあ、毛ずねを除いてという話だが）。

それは、僕にとって唯一の女装経験だった。

「ボブ、でも、あれは、ハロウィンだったからで……」

「ああ、わかってる。忘れてくれ」

そのあと、僕らは、しばらく黙り込んでベッドに座っていた。ボブは敗北感にうちひしがれた感じで、膝にひじをつき頭を抱えてこんでいる。

僕の方も頭を抱えていたが、その頭の中は、今のボブの言葉にとらわれていた。どう考えても、今、僕らに選択肢はない。つまり、ボブの言ったことが唯一の選択肢だということだ。

「うまくいくと思ってるのか？」

僕は、ボブの方を向いて言っていた。

「うまくって……？」

「だから、これ」

僕は、例の配偶者用ネームプレートを示しながら言った。

「ああ、まちがいないよ！」

即座にボブは、そう言って立ち上がった。

その目の中でスパークした希望の光が、あっという間に熱を帯びた。そんな簡単なことじゃないはずなのに、決断はすでになされ、問題は……すべての問題は解決し、僕らがベンチャーにかけた情熱はふたたび燃え上がったようだ。

「……やべ」

僕は、ことが動き出すのを阻む最後のチャンスを逸したことを悟り、小さくつぶやいた。

「さあ、忙しくなるぞ。やらなきゃいけないことはいっぱいあるからな、ブライアン」

ボブはもうプランニング・モードに切り替わっていた。

自分のノートパソコンを取り出し、部屋のインターネット端子につないでいるボブを見て、僕は、他に方法はないものかとコンベンション資料にもう一度目を通した。すると――

「ビンゴ！」

ボブはすぐにそう言い、今度は携帯電話をとり出した。

その電話で、ボブが今の状況をあまりに正直にしゃべっているのが信じられず、僕はノートパソコンの画面をのぞいた。

そこで、驚くと同時に納得もした。

このコンベンションが開催されている街はかなり大きい。たしかに、その手のフェティッシュな――つまり、トランスジェンダーのコミュニティーをお得意様にしているような――店もあ

るわけだ。

「……マジかよ」

僕は、画面上のシリコンのブレストフォームを見つめながら、ボブの背中につぶやいた。

「よし、行こう」

電話を切ると、ボブは言った。

「俺たちが行くまで、店を開けててくれるってさ」

ものごとが急テンポで進んでいたことは、きっとよかったんだろう。もし、少しでも考える余裕があったとしたら、僕はその進行にブレーキをかけていたにちがいない。

そんな間もなく、ボブと僕は、そのフェティッシュ・ショップで、何を買ったらいいか店長と相談していた。

店にはビジネスコンベンション向きの服はあまりなかった。でも、「女の

子をつくる」ためのアイテムならいっぱいあった。レジのそばには、次々にそんな商品が積み重ねられていった。

そこには、僕の「男のもの」を折り曲げ、股の間に固定する革ひものような下着があった。下半身に女らしいカーブを与えるパッド入りのガードルや残酷なほど硬い芯の入ったコルセットがあった。ブラや脱毛剤もあった。

神経質になっている僕がいちばんビビったのは、「胸」を選んだときだった。

不幸なことに、トランスジェンダーの世界には、普通サイズの胸の需要はないようだ。その買い物如山に加えられたCサイズのニセおっぱいを見て、僕は不安になった。さらに、それらを僕のボディに固定するという「医療用接着剤」にも不安が募った。それは、カクテルドレスで出る正式のディナー

があると聞いた店長がつけ加えたものだった。

「お客様の言うようなオープントップや背中が開いたドレスを着るのなら、ブラは使えませんよ」

彼は、そう言って、そのクレージーな接着剤のチューブを渡してよこした。

「これなら、そのブレストフォームを貼りつけっぱなしで、少なくとも1・2週間はもつはずですよ」

化粧品の選択はけっして気持ちの弾むものではなかったし、ラメのたくさん入ったものや七色に輝く特大のつけまつげなんかは、当然、除外された。僕らがごく普通のパンケーキやおとなしめのウィッグを選んでいるのを見た店長は、熱意があるとは言えない様子にすぐ気づいたようだ。

「トランスジェンダーの人をお得意に

している美容師の知り合いがいるんだけど」と彼は言った。

「彼女に頼めば、すべてうまくやってくれますよ。ヘア・エクステンションとか、それに、ヒゲのレーザー脱毛とか。永久脱毛じゃなくて、でも、3週間くらいはベビーのような顔に保つやり方でね」

「紹介してもらえますか？」

僕が何か言う前に、ボブがそれに飛びついていった。

「もちろん。ちょっと待ってて」

そう言うと、彼はすぐに電話した。

その結果、僕は、翌朝9時にアポイントができ、それまでに顔以外の全身の脱毛をすませておくことになった。

僕らは、ふた袋になった買い物と、明日、服を買うときのためのサイズのメモをもらい、その店をあとにした。

次の朝、先にホテルの部屋を出ていったのはボブの方だった。僕が手伝えなくなったぶん、コンベンションの事前準備が大変になったからだ。

脱毛を終えたところで、その姿を鏡に映し、僕は文字通りショックを受けていた。ただ脱毛したというだけなのに、僕の体は妙に女っぽく見えたのだ。

不安はいよいよ募ったけれど、列車はすでに動き出していた。

教えられたとおり、僕は、ヒゲも剃っていない汚い顔でボタндаウンのシャツを着、そして、僕の「ガール・メイキング・セット」を持って街に出た。

ありがたいことに、そのアポイントは、美容院とかではなく、プライベートな部屋だった。

ジャネットというその美容師も、僕の置かれたシチュエーションをすぐわ

かってくれて、僕に気を使わせなかった。彼女のいつもの客のように、したくてしているのではなく、必要に迫られてやっているという僕の立場をじゅうぶんに理解し、いちいちこちらの判断を仰ぐことなく、ことを進めてくれたのだ。

「まず先に、服の方をやっときましょ」
彼女はそう言った。

「でも、まだ女の服なんて、なにも買ってないですよ」

「お化粧さえすれば、たとえどんな服を着てても、あなたは男には見えないと思うわ」

彼女は、そう言いながら微笑みかけた。

「だけど、出る場所は出た方がいいでしょ。ことに、このあと、服を買いに行くんだとしたらね」

「ああ、なるほど」

「それにね……」

うなずいた僕に、彼女は、さらに笑いながらつづけた。

「つけ爪がとれるんじゃないかとか心配することになる前に、かたづけといた方が楽だと思うの」

それで、バスルームに入った僕は、なんだか情けない男性自身をたたみ込み、肋骨をきしませる下着の中に体を縛りつけた。

ハチのようなウエスト、女っぽいヒップライン、びわ型のお尻、そして、出っ張りのない下腹部……僕は、この日二度目の衝撃に震えていた。

緊張にびくびくしながらバスルームを出ると、ジャネットのやさしい微笑みが、ふたたび僕を落ち着かせてくれた。

そのあと、彼女の手助けと医療用接着剤の力で、僕は、Cカップ分の目方

が僕の胸の肌を引っ張るのを感じるようになった。でも、ジャネットがブラをつけてくれると、その重みは緩和された。

その上からシャツを着てボタンをはめ、ふだんより大きなお尻をズボンの中にねじ込んだ。そんな体のカーブと、出っ張っていない前の部分のラインは、最後の5つめの穴でとめることになったベルトによって、さらにアクセントがつけられた。

僕は、危険なくらいホットでかわいいボディを手に入れていた。

「長い髪をつけたあなたを見るのが待ちきれないわ」

ジャネットは、どこか興奮したように笑いかけた。

「でも、つけ爪がきちんと貼りつくまでに、髪とかをやるのと同じくらいの時間がかかるから、そっちから始めま

しょうね」

とりあえず僕は、うなづくしかなかった。

ジャネットが、長いアクリル製のつけ爪にのり付けし、貼りつけ、ヤスリをかけ、それらを僕の体の一部にしている間、僕はどうでもいいような世間話をしながら、他人事のように見えていた。

その、シルクコーティングされ優雅に磨かれたフランス製のネールチップは、僕の手を、まちがいなく「可憐」という感じに変えていた。

そのあとされた、光沢のあるピーチのペディキュアは、僕の足を、確実にかわいいものに見せていた。

顔のレーザー脱毛は、かなり痛かった。

そのプロセスは、僕のヒゲの上におかしな臭いのするクリームを塗ること

から始まった。

そのクリームが落ち着いたところで、ジャネットは、僕をなにかの照明装置のようなものの下に寝かせ、その光線を僕の顔の上で毛穴をたどっているらしいルートで動かし、ヒゲを焼いていった。

その作業が終わると、彼女は僕の肌をモイスチャー・ローションでマッサージした。まだ少しヒリヒリしたけれど、僕の顔は、まるで赤ん坊のようになすべすべになっていた。

次に彼女は、髪作業にかかった。

「何色がいいかしら？」

「今の髪色のままじゃ、だめかな？」

そうきくと、ジャネットはおかしそうに笑った。

「エクステンションで、まったく同じ色ってわけにはいかないわよ」

そして、まだ笑い声でつぶけた。

「だから自毛も染めなきゃいけないの。どんな色がいい？ ブロンド、ブルネット、赤毛……？」

「ブロンド」

僕は、適当に答えていた。

「そうね、ブロンドの方が、なにかとお楽しみも多たっていうわね」

彼女は、そう言ってからかってきた。

いやな臭いととともに、自分の髪が輝くブロンドに変わっていくのは、なんだか妙な気分だった。

ジャネットが僕の自毛にヘアエクステンションを編み込んでいく長いプロセスが始まったところから、僕はそれを見ることができなかった。その前に、彼女が、仕事場の壁に一枚だけしかない鏡から、椅子の向きを変えてしまったからだ。

彼女は手際よくやっているようだったが、それが終わるまでには、ずいぶ

んの時間を費やした。

レイヤーにカットし、形を整え、髪にハイライトを入れ、大きめのウェーブをつけたあと、最後に彼女はスプレーでセットした。

「眉の形を整えさせてね」

彼女はそう言い、僕が返事する前に、すでに毛抜きを顔に近づけていた。

「……あの、あと、どのくらいかかりそう？」

ジャネットが引き抜きつつける眉の痛みが、まるで永遠につづくような気がして、僕はびくびくときいた。

「あとちょっとよ、お嬢ちゃん」

彼女は、笑いながらそう答えた。

「……オーケー、こんなもんね。メイクのしかたを覚えられるように、椅子をまわすわね」

「……えっ、うそ！」

鏡を前にして、僕はおろおろとうろ

たえながら、つぶやいていた。

「……これが、……僕？」

「ねっ、美人でしょ」

けっして商売上のお世辞などでなく、彼女は自分の技術への自負をも込めて微笑んだ。

ファンデーション、フェイスパウダー、アイライナー、アイシャドー、チーク、マスカラ、リップライナー、口紅、さらに「あなたの眉をよりセクシーに印象づけるための」ブローペンシル……そんな作業をしながら、ジャネットは、何をすべきか、そしてそれ以上に、何をしてはいけないかを説明してくれた。

僕はもう、消えてなくなっていた。服でさえ、ぼくがかつてブライアンという名の間人であったという証拠にはなりえなかった。

鏡の中にいるのは、信じられないほ

ど理想的な女性……もし僕がかたわらにいたら、肩を抱きたくなるような女性だった。

ジャネットに感謝の気持ちを伝えながらも、僕はまだ、ショックと信じられない思いの中でおろおろしつづけていた。

最後に別れの言葉を交わし、そのメイクされた顔と、恥ずかしい思いと、恐怖と、そして女らしい不安感とともに、僕は外に出た。

でも、そんな心配はいらないのかもしれないという気もした。

今の僕は、それなりに「いい女」に見えるはずだ。そんな思いが、僕を突き動かした。

今、計画を中止しなければならない理由なんて、なにもないだろう。

ジャネットと過ごす間、ずっとしていた世間話には、髪やメイクについて

のこと以外に、買い物にふさわしい店の情報もあった。

街はずれのショッピングモールは9時まで開いているということだったが、僕は急ぐ必要を感じた。

「アン・テラー」という店で試着室に入った時、僕はまるで幻覚の世界に入り込んでしまったような気がした。そして、選んだ服を次々に着ていくうち、そんな感覚はますます拡大していった。

ブライアンの服でさえあれだけ「いい女」に見えたのだ。考えてみれば当然なのに、ぴったり合った服を試着することでどれほどすごい美人になれるかということに、僕は心の準備ができていなかったのだ。

なんとかそれをやり終え、その「さなぎの部屋」から出てきたとき、僕は、

きっちりした仕立てのビジネススーツ4着と、赤いワンピース1着を手にしていました。どれも、砂時計のようにくびれた体の線を強調し、すそが太腿の真ん中あたりまでしかないものだった。

「ロード・アンド・テーラーズ」という店でも、ものごとはだいたい同じように進行した。僕はそこで、数着のカクテルドレスと1着のイブニングドレスを買っていた。そのどれもが、「セクシー」という描写がぴったりだった。

選んだ服に合わせて、アクセサリー選びもした。それがどれほど数が多くてややこしいものであるかに、僕は驚いた。

次にストッキングを買い、僕はすぐに女子トイレでそれを履いてみた。

耳にピアスをあけたのは、その場で決めた予定外の出来事だった。クリップ式のイヤリングが、あまりにきつく

て痛かったからだ。

目もくらむほど鮮やかな青のコンタクトレンズを買ったのも、まあ、僕の気まぐれだ（だって、ブロンドのロングヘアによく似合ったんだもん）。

「あら、ボビー！」

その電話に、僕は女の子っぽい声で出た。ちょうど、「ナインーウエスト」という店で、女店員が、ストッキングに包まれた僕の足首にかわらしいストラップをとめている時だったのだ。

「おい、もう7時だぞ！　いったい、どこで何してるんだ、プライアン」

「もう少しで、買い物が終わるわ」

僕は女の子っぽい声でつぶけた。華奢な体つきには、その方が自然だと思えた。

「買い物？　まだ？　今夜とあと四日分の服を買うだけなんだろう。何をぐず

ぐすしてるんだ」

「男の子って、わかってないのね」

僕は、そうはぐらかしてから言った。
「タクシー代を節約したいでしょ。車で来て拾ってくれない？ そしたら、いっしょに夕食もとれるしね。ここまでなら、30分くらいで来られるはずだから」

モールの中にある噴水のへりに腰掛け、たくさんのショッピングバッグをまわりに置いた僕は、ボビーが、僕を見つけ出そうと行ったり来たりしているのを見ていた。

すでに何度も目に入っているはずなのに、気づかないのだ。

僕はクリーム色のキャミソールに、ぴったりとした千鳥格子のビジネススーツを着ていた。腿の中間あたりから露出し組まれた脚の薄いヌードストッ

キングは、クリーム色のパンプスまでの間で光沢ある輝きを放っていた。

と、ボブが、ちょっとイライラしたように、携帯のフリップを開けた。

「……ブライアン！ 俺は、もう着いてるんだぞ。いったいどこにいるんだ！」

「噴水の方を振り向いて、近くにいるかわいい子を探してみて。この15分間に、もう何度も目は合ってるんだけどね」

見ていると、こちらを向いたボブの顔が、スローモーションで驚きの表情に変わった。

「マジ……かよ……。ブライアン？」

電話の中で、ボブがつぶやいた。

「僕……あたしだって、信じられないもん」

アイコンタクトをとりながら、僕は正直に答えた。

ボブが近づいてきたので、僕はスカートすそを直しながら立ち上がった。

そして、ボブの手を取り身を寄せて、その唇にあいさつのキスをした。彼はショックに、思わず声を漏らした。

「うっ……！ な、なんてことを」

さらにそう言いながら、後ずさった。

「べつに、なんてことないでしょ」

僕は平然とそう言いながら、買っておいた指輪をボブの指にはめた。僕の方は、輝くジルコニウムの指輪と、おそろいのブレスレットをしていた。

「だって、あたしたち、結婚してるわけだから、こういうちょっとしたことに慣れておかないといけないんじゃない？」

ボブはさっきのキスからまだ立ち直れないらしく、黙ってうなずいた。

「このたくさんの紙袋、あたしの代わ

りに持ってくれない？ ボビー」

僕はほくそ笑みながら、言った。

「あ、ああ。もちろん、プライアン」

「ボビー、こんなカッコしているうちは、その呼び方はまずいんじゃないかな？」

「じゃ、じゃあ、なんて呼べばいい？」

「あなたの好きな名前にしていいわよ」

「……ステーションなんて、どうかな？」

「いいわね、それでいきましょ」

僕はすぐにうなずいた。

「オーケー、ステーション」

ボブは、注意深くそう呼びかけた。

「この荷物をホテルに置いて、それから食事だな」

「えっ……、マジかよ。ステーション」

そのたくさんの紙袋を車に積んでいる時、やっと気づいたらしく、ボブは言った。

「これ、いったい、いくら使ったんだ？」

「すごくたくさん。でも、もう一人分の登録料よりは、ずっと安いわ」

荷物を積み終わると、ボブは、ほとんど本能的という感じで、僕のために助手席のドアを開けてくれた。そして、僕が座席にお尻を落とすあと、シルキーな脚をそろえて車内に引き入れるのを、首を振りながら見つめていた。

「ステーシー、素敵だよ。君がこんなホットな女になるなんて、信じられないよ」

彼は、まだショックの中にいる口調で言った。

「ありがと。あたしも、そう思うわ」

どんな失敗をして恥をかくかわからないので、僕らは、部屋で二人きりになったときも、キャラクターに扮して

いようと決めた。

ただ、それはちょっとうっとうしいことだった。たとえば、ディナーの前にも「化粧直し」が必要なのだ。アイシャドーと口紅を濃いめの色に変えたり、マスカラをちょっと強めにしたり、香水をつけ直したりといったふうに。

「君は、ほんとに素敵だよ」

ボブが、また信じられないという感じで言った。

「同じこと、何度も言わないで、ハニー」

僕は、既婚者カップルらしいイメージを高めるために、またちょっとちがう言い方をしてみた。もっとも、そんな思いとは別に、顔が赤らんだのは確かだが。

「……でも、うれしいわ」

「そうだろ、ダーリン」

夫婦らしい愛情表現の言葉に照れな

がら、ボブは笑い返した。

ホテルのレストランに行くために、エレベータまで歩いているときだった。廊下の反対側から、別のカップルがやってくるのに気づき、二人とも不器用に緊張してすれ違った。

「もうちょっと、くっついてた方がいいかもね」

通り過ぎたところで、僕が言った。

するとボブは、なにかを決意するようにうなずき、僕の体に腕をまわしてきた。

「……ちょ、ちょっと、やめてよ、ボブ！」

僕はそう言いながら、その手をもっと自然に、僕の背中に当てるように移動させた。

「ゲイとかになりたいわけじゃないんでしょ。今のじゃ、まるで、そんなふ

うじゃない。こんなこと、ぜったい誰にも話せない」

「あ、ああ、そうだな。ごめん、ステシー」

「変なこと考えちゃ、ダメよ」

僕は、彼に寄りかかるようにして、寛大な微笑で、そうからかった。

でも、彼は、こわばったままで、それに笑い返せないようだった。

「いい子ね、あなた」

僕は笑い出さないように気をつけながら、つけ加えた。

僕ら二人にとって幸いなことに、ボブの方が、それに吹き出してくれた。

ディナーは、なんだかへんな感じだった。それが、あまりにもふつうに進んだからだ。

僕らは、会話しているうち、お互いの役に相互作用を受けるように没入し

ていき、いつしか、すべてについてまったく違和感を感じなくなっていた。

ワインのせいだったかもしれないが、女らしさへの感情移入は、いつしか僕を本物の女のような気持ちに導いた。

さらに奇妙なことに、僕は、実際にボブの妻であるような感覚を持ち始めていた。

背中に手を添えてテーブルまで導いてくれたことや、椅子を引いてくれたこと、お互いの個性の深いところで結びついている心地よさを感じたこと、うちとけた笑いやお互いへの気づかい、二人掛けのテーブルの小さささえロマンチックな感じで、それらすべてが、まるでデートのような雰囲気醸し出していた。そして、食事が終わるまで、僕は、それを、少なからず楽しんでいた。

「……マジかよ」

黙ったまま部屋まで連れ帰るボブの腕にしがみつくようにしながら、僕は自分自身にそう言っていた。

今夜は、まちがいなく魅力的なデートだった。もしこれが、現実の男と女だったらという話だが。

寝るまでにやることが多くて、想像していたよりずっと時間を取ってしまった。

それらが終わり、僕は、ゆったり休むために持ってきた大学のロゴ入りTシャツとショートパンツ姿で、バスルームの鏡の前に立っていた。

鏡の中では、ステーシーという名の女性が、僕を見つめ返していた。パッド入りガードルをとり、メイクも落としたというのに、じゅうぶんにそう見えるのだ。

髪、すべすべの脚やボディ、爪、眉、ふさがるといけないのでとれないピアス、そしてもちろん、ノーブラでもTシャツを押し上げている胸……それらすべてが、僕を就寝前の女性に見せていた。

「えっ、何してるの？」

僕は、ボブが小さなソファに体を押しこもうとしているのを見て言った。

「ステーシー、ベッドの準備はできるよ」

「なに馬鹿なこと言ってるの」

僕は、自分でも驚くくらい強い口調で言い返していた。

「明日は忙しい日になるのよ。しっかり寝とかなきゃいけないでしょ」

「ベッドは君が使えよ。俺はいいから」

「大学時代にヒッチハイク旅行をしたときには、もっと小さなベッドに、も

っとたくさんの連中が寝たはずよ。ボビー、あなた、なに考えてるわけ？」

「ああ、それはそうだけど、でも……」

ボブは、驚くほどおどおどした感じ
で言った。

「マジで言ってるわけ？」

そうきくと、ただうなずき返した。

「ボビー、あたしは……いや、僕は、僕なんだ……ぜ。馬鹿なこと考えるのは、やめてくれよ！僕は、君の……その……あれやこれやを触りたいなんて、これっぽっちも思ったことはないんだからな。ちッ……、たしかに、僕自身、こんなふうに変身したことに興奮はしてるさ。だけど、忘れないでもらいたいのは、それとこれとは別問題だってことだ。それなのに、君は、僕がすっかり……その気になってるとでも思ってるのか！」

ボブは、僕の方をじっと見ながら、

僕の突然の爆発の意味を考えているようだった。

僕の方は、どうしたわけか、ボブをソファで寝かせないということにこだわっていた。

いっしょに寝ることが……いっしょに寝ても平気だということが、僕が現実世界や現実の僕自身とつながっているための「命綱」だとでもいうように感じていたのだ。

ボブにしてみれば、ソファで寝る方が、ずっとゆっくり休めるということかもしれないのに。

「そうだな、ステイシー。いつもどおり、君の言う方が正しいよ。べつに変な意味はなかったんだ。ごめん」

あやまるボブに、ちょっと考えたあと、僕は答えた。

「僕の……あたしの言ったことも、変な意味にとらないで……ね」

ボブがさっさと起き出し、ホテルのジムにトレーニングに出かけたようだったので、その間に僕は、朝の新たなルーティンとなった身づくりをした。

鏡に映った姿は、僕をまた呆然とさせた。ヒゲを剃らなくていいのはありがたかったが、やはり、なんだか奇妙な感じだった。それでも僕は、けっこううまく、ヘアセットやメイクをこなした。時間をかけて、ジャネットのやったことをひとつずつ思い出しながらやったおかげだろう。

そのあと僕は、自分自身の体を絞り上げ、ストッキングに脚を通し、シルクの赤いミニワンピースを着、そして、4インチの赤いピンヒールを履いた。アクセサリ類を着け、香水をスプレーしたところで、汗をかいたボブがジ

ムから戻ってきた。

「……マジかよ、ステーション。すごく素敵だ」

「ありがとう」

僕は、そのワンパターンのコメントが気に入らず、素っ気ない口調で言った。

ボブは、そのまましばらく僕を眺めていたけれど、やがて、思い出したようにバスルームに駆け込んだ。僕は、そんなボブのしたいようにさせていた。

「俺が準備してる間に、スケジュールでも調べといたら？」

バスルームのドアの向こうからボブが言った。

それで、コンベンションのツールの封筒を取り上げた僕は、小さなワンピースに例の名札をとめる場所を見つけたあと、インフォメーションのパンフ

レットに目を通した。

僕らが出展することになっているブースでの仕事はもちろんだが、それ以外にも、会っておくべき人がいっぱいいたし、見ておくべき展示もたくさんあった。

それに、どうやら、僕らがやっているこの仮面劇は、思わぬ特典をもたらしそうながしてきた。

ビジネスというものは、世の中の人々が思っているよりずっと、社交の場で生まれるものだ。僕らが、二人で平然と「ガラ・ボール」(大規模なダンスパーティ)に参加できることや、僕が、女性向けに催されるサブ・イベントに出席できることは、カバーできるビジネスの機会が圧倒的に増えるということだろう。

ボブに連れられコンベンションへの

参加手続をすませたあと、僕は、背中に軽く添えたボブの手に導かれ、朝食をとりに行った。

じつは、この日の日中、僕らがまともに言葉を交わしたのは、この朝食が最後の機会となった。あとは、30分ごとにブースの「店番」を交代する瞬間、顔を合わせただけだ。

そんな時、僕らは、幸せな夫婦として、できるだけ自然に見えるよう努力したわけだが、そこで交わしたあいさつのキスは、当初、どうしても緊張した不自然なものになった。ところが、驚いたことに、そんな不自然さは長くつづかなかった。この日の日程が終了するまで何度も繰り返すうち、そのキスがあたりまえの日常的な行為のようになっていったのだ。

そのあと、イブニング・カクテル・レセプションに出る準備をしようと自

室へ向かう途中で、僕とボブは鉢合わせしたのだが、そこでも僕らは、ほとんどなにも考えずにあいさつのキスを交わしていた。それはすでに、ごく「自然なこと」になっていた。

僕が化粧を直し身づくろいをする間、ボブはそれを待ちながら、今日の成果のメモを比べていた。僕は、薄い黒のストッキングと細身の赤いカクテルドレスに着替えた。ホルターネックで、首の後ろで結んだリボンの下に、背中が大きく開いているデザインだ。「ステーシー、それもすごく素敵だよ。いや、それじゃ、ちゃんと言えてないな。君は、気絶するくらい素敵だよ」

ボブが新しい服に合わせたリアクションをしようとするのが、おかしいようなかわいいような気がして、僕は思わず微笑んでいた。なんだか、うれし

かった。

と、ボブがつづけた。

「その服だけじゃなく、君の今日の働きにも感心したよ。僕の二倍近くも見込客をつくってるんだからな」

「赤い服の女の販売能力を、過小評価しちゃダメよ」

ボブはそれに笑いかけたが、こちらを見て、その笑いを引っ込めた。

「もしかして、マジで言ってるわけ？」

「ボビー、こんな言葉があるのを知ってる？ セックスこそ真の売り物だ……って。最初は気味悪かったけどね。だって、そこにリストアップしてある男たちはみんな、じつはあたしをものにしようと思って近づいてきたんだもん。でも、彼らを非難することはできないわね。みんな、あたしの正体を知らないわけだし。それで、彼らと話してる最中に、商談を持ちかけて、色よ

い返事を引き出したってわけ。まあ、リングがあたしを守ってくれたおかげだけどね」

「えっ、リング？」

ボブは、話が見えなかったらしく、聞き返した。

「うん、結婚指輪。男の人って、結局みんな、さかりのついた犬ね」

「男の人……ってか？」

ボブは、そう言って笑い出した。

「身に覚えがあるでしょ？」

「ふふ、そろそろ行こう。ステーション」

「もう一分だけ待って」

僕は、素足に感じるカーペットの感触を楽しみながら言った。

「あたし、ハイヒールのせいで、死にそうなんだから」

そのカクテルパーティの間も、僕の足はなんとかサバイバルし、僕らはそ

こで、昼間、ブースを訪ねてくれた女性、フランと、その夫のピーターの二人にめぐり会った。パーティーが長々とつづくうちに、僕ら四人はよりうちとけた関係になっていった。そして、ボブと僕は、フランがいわゆる「ビッグ・フィッシュ」であることに気づきはじめていた。つまり、僕らがこのコンベンションに期待し、夢に見た「大物」ということだ。

彼女の方も、僕に、輝いている既婚女性という印象を持ったことはたしかだった。

「こういう場所で、あなたみたいに真っ赤な服を着られる人って、じつはなかなかいないのよ。それって、一人の女として、男の世界を恐れていないってことでしょ」

フランは、そんなふうに、僕のことをほめてくれた。

「そうだ、ステーシー、いいことを思いついたわ」

彼女は、そこで突然、話の方向を変えた。

「ブースの間を泳ぎまわるなんて馬鹿みたいなことはやめて、明日、二人でショッピングに出かけない？」

僕が答えようとする、それより前に、彼女はボブの方にさじを向けた。

「ちょっと彼女をお借りしていいでしょ、ロバート」

「もちろん。かまいませんよ」

ボブは、無頓着な様子を装って言った。

コンベンションを抜け出して貴重な時間無駄にすれば、予定がこなしにくくなることは、僕ら二人とも承知していたが、大きな企業のオーナーであるフランには、言うことを聞かせる権限も、そして、言うことを聞くだけの価

値もあるのだ。

「決まりね。11時にロビーで待ってるわ。女の子どうし、楽しみましょ」

その夜、最終的にベッドに倒れ込んだ時には、ボビーも僕もくたくたになっていて、すぐに深い眠りに落ちた。

ベッドの目覚まし時計は僕の側にあったのだが、その音が小さすぎて、翌朝、僕はなかなか目を覚まさなかったようだ。

それで、ボブに二三度小突かれたあと、結局は、自分でそれをとめようとボブが僕の体の上に手を伸ばしたところで、やっと目が覚めた。

「……あっ、おはよう、ホビー」

僕は、まだとろんとした目で言った。「うん、おはよう、スィーティー(sweetie)」

ボブは、そう言いながら、ごく自然

にキスしてきた。そして……

「……えっ、ワオ！ 何してるんだ、俺！」

のけぞるように飛び起きた。

「……気にしないで、ボビー」

僕は、その何気ない行為から毒気を抜こうと、そう言っていた。

僕らは、そのことにそれ以上触れることなくベッドを出た。

僕が紺のスーツ、それに合わせたパンプスという姿に身繕いしている間、ボブは、フランによって空けられてしまった穴を埋めるため、必死にスケジュールを組み直していた。

フランとのショッピングは、楽しかったけれど奇妙な体験だった。

実際の話、僕はさほど何かをショッピングしたというわけではなく、女っ

ぽい儀式の世界に浸っていたという感じだ。それは、たとえば、女性特有の姉妹のような関係の聖域に潜入し、のぞき見しているといった感覚だった。

服の生地感触を楽しみ、靴を試着し、いろんな香水を試し、そして、その間に交わされるすべての「少女っぽい話」の中に、同じような軽さでビジネスの会話が隠れていたりするのだ。

キュートなミニのサマードレスの支払いをしている時、僕は思った。

要するにこれは、男がカントリークラブのロッカールームでするビジネスの女性版なんじゃないか。

そして、だとすると、僕はまだ、そんな好機をつかまえていない気がした。

「ロバートって、ほんとにハンサムね」
フランが言った。

「あなたと彼って、お似合いのカップ

ルだと思おうわ」

「ありがとう、フラン」

僕は、それに微笑み返した。

「でも、あなたとピーターほどじゃないわ。二人とも、すごく幸せそうで、いっしょにいるのが、ほんとにぴったりって感じたもの」

その言葉に、フランは顔を赤らめた。

「ステシー、あなたのこと、大好きよ。あなたとなら、ほんとに仲よくなれる気がするわ。きのう会った時より、もう、ずっと近づけた気がするし」

「あたしも、あなたのこと、大好き、フラン」

僕は、それに微笑み返した。

「親友？」

「親友よ」

買ったものを持って彼女のルームジンに向かう途中、僕らは、姉妹同士のような抱擁を交わしていた。

車がホテルに近づいても、僕らの会話の中心は、今日はいいいショッピングをしたというようなことに終始していた。僕は、このままでは、フランのビジネスにうまく着地する機会を逸してしまうと感じていた。

でも、何をどう言えばいいのか？

そこで、ちょっと会話が途切れた瞬間があり、僕はフランの方を向いた。

「フラン、あなたにお客様になってもらうために、あたしに出来ることがあったら、言って」

「ふふ もう、あなたは、それをしてくれたじゃない」

フランは、くすくす笑いながらそう言った。

「これを、人間関係のビジネスって言うのよ。私がいちばん信じてるやり方なの」

「つまり、今日のこと……？」

僕は、思い切ってきてしてみた。

「ええ、ステーション。あなたのことをよく知るために、つき合ってもらったの。とっても楽しかったわ」

「あたしもよ。フラン」

僕は、フランの上品な手を取りながら言った。

「あなたといっしょにいる間、ほんとに楽しかったわ」

ホテルに着いて別れるところで、僕は、男たちも含めた4人でディナーをとらないかと誘った。しかし、フランは、次の商談のために今日のうちに発たなければならないから無理だと、心から残念そうに言った。

「でも、私たち、再来週の金曜日、あなたたちの住んでる地方に行くことになってるのよ。ディナーは、その時に

しない？」

「わあ、素敵！」

僕は、それが何を意味するかを吟味する前に、心の底からのうれしさを込めて言っていた。そしてすぐに、内心、パニックに陥った。

それは、僕がふたたびステーションになる……いや、もっと高い見込みとしては——女らしい髪型や眉を維持しなければならぬのだから——、その二週間ずっと、ステーションのままでいるということだった。

「あなたたちをお招きできるなんて、うれしいわ」

僕は、まだ混乱したまま、そう口走っていた。

「素晴らしいわ、ステーション。どこかのレストランで会うより、その方がずっと素敵ですもんね。ピーターと私は外食が多いから、家庭料理に餓えてる

の。それに、私たちみんなが、お互いにもっとよく知り合えるチャンスになるわ。住所を教えて」

フランは勝手に話を進め、そうきいてきた。

どうやら僕はまた、このストッキングの足をおかしなところに突っ込んでしまったようだ。

べつに「家に招待する」って意味で言ったんじゃないのに！

これ以上、妙なつまずきを繰り返さないよう、僕は、急いで思考の焦点を合わせた。

そして、ボブのアパートの情報を伝えた。僕のところよりは大きくて、まともで、近所の環境もよかったからだ。「フラン、あんまり期待しすぎないでね」

僕は、すでに言い訳をはじめていた。「とりあえず一時的に住んでるだけの

アパートだから。ホブとあたしは、今、家を探してるところなの」

「そんなの、平気よ。それより……」

彼女は、僕のコメントの意図を無視してつづけた。

「新しい家で、二人の暮らしを始めるのね。すごくエキサイティングなことよ。そこで、二人の楽しい思い出がいっぱい生まれるのよ。待ち遠しいわ」

さっきよりもっと姉妹のような抱擁のあと、しばしのお別れの言葉を交わし、僕は部屋まで行って、そこにショッピングバッグを投げ入れた。

ボブは、本来の予定よりずっと長い時間、ブースの「店番」をつづけているのだ。

僕は、彼と交代するため、コンベンションの会場へと急いだ。

僕は、たった今成し遂げてきたこと

を勇んで報告するつもりだったのだが、ボブの顔を見たところで、フランのビジネスの優雅なやり方と、僕がスカートを履いていることの理由を思い出した。

「ハイ、ハニー」

ボブは、なんだかおざなりなあいさつのキスとともに、どこか皮肉っぽい口調で言った。

「ショッピングは、楽しかったかい？」

「ええ、フランをつかまえたわ」

僕はわき上がる笑いを、必死に抑えながら言った。

「……えっ、なんて？」

ボブは、すでに目を輝かせはじめながら、聞き返した。

「だから、大物顧客を獲得したってこと。どうやら、ショッピングはテストだったみたいね。で、あたしたちは、それに合格したってわけ！」

僕は心から興奮していた。ただ、今のキャラクターを壊さないようにと思っていたぶん、その興奮ぶりは、どうしても、浮かれてキャッキヤと騒いでいる女子高生のようになっていた。

「すげえ！」

ボブは、僕の肩をつかむようにして言った。

「信じられない！ やったぜ！ やったんだ！ ああ、ステーション！」

そう言いながら、僕を抱きしめた。

そして、キスしてきた！

それは、これまでのような、ことをうまく進めるためだけの、意味のない、型どおりの、あいさつのキスとはちがっていた。情熱的で、心の底から突き動かされたような、唇どうしをぴったり押しつけ合うキスだった。それは、ある意味、この場にふさわしいものと思えた。

しかし、そのキスはすぐおわり、ボブの抱擁は、勝利のハグ——たとえば、ワールドシリーズで優勝チームのメンバーどうしが抱き合うような——に変わっていた。

ステーションであることと、そんな抱擁が、どこか似合わないような気がして、僕は体を離れた。

「あとでゆっくり話すわね、ボビー」
僕は、気分を変えるように言った。
「疲れたでしょ。ゆっくり休憩してきてよ」

その日の日程が終わり部屋に引き上げるまでの短い時間で、僕はけっこうたくさんの見込み客をつかまえた。たいていは男だったが、中には女性もいた。

ある女性は、長い商談の末、まだ決心がつかないようすで言った。

「もう一度会って、もう少し話をする方がよさそうね」

「そう、いいわね」

僕は、明るく共謀を企てるという感じで言った。

「明日のランチタイムの前後に、ここから逃げ出して、いっしょにショッピングでもしない？」

「ほんとに？」

彼女は、驚いたように聞き返した。

「きっと、楽しいわよ」

僕は、興味津々という感じでささやいた。

「オーケー」

彼女はうれしそうにそう答えた。

「約束よ」

部屋に戻ったところで、僕は、フランと過ごした昼間のことについて、ボブに話した。ただ、彼女と決めたディ

ナーのことについては、まだないしょにしていた。

ショッピングは、ロッカールーム・ビジネスの女性版なのだという考えについても、ボブに説明した。それは、そのあと、明日のショッピングの計画を持ち出すための前振りでもあった。

「……でも、これ以上買い物する金の余裕なんてないだろうが」

「だいじょうぶ。その経費は、かならず回収できるわ」

僕らは、祝杯をあげるつもりだったのだが、カクテルパーティーは、けっして騒げるような場ではなかった。それは、大学のコンパとはちがうのだ。

僕らは疲れ切っていたし、明日の仕事をシャープにこなすために寝ておく必要もあった。けっきょく、早々に切り上げ、二人ともすぐに眠りについた。

次の朝、ボブはまた、僕の体の上に手を伸ばし、目覚ましをとめることになった。

僕がとろんとした目で見上げると、ボブの顔がすぐ上にあった。

「おはよう、スィーティ」

僕の方が、からかうような調子で言った。

「おはよう、ハニー」

ボブは、僕が暗に示した昨日の朝の、出会い頭の事故みたいなキスを思い出したようで、苦笑しながら答えた。

そんなふうに冗談にしようとしたにもかかわらず、その雰囲気は、思わぬ感覚の前にすぐ不自然ものになった。

どうも、僕らがあいさつの時に交わしつづけてきた芝居のキスは、演技の域を超え、習慣として体に染みついてしまったようなのだ。

すぐ近くで微笑み合った僕らの顔は、その数インチの距離を、中途半端にためらっていた。べつに意味ないものとして繰り返してきたキスを、お互いどこかで期待しているところがあり、それをがまんするには、明らかに意識的な努力がいった。

何気ない「おはよう」のキスをしない方が、かえって不自然な気がするのだった。

それで結局、ボブは僕に「おはよう」とキスをし、僕もそれに応えていた。

その出来事をそれ以上危険なものにしないためにボブがしたことは、すぐに飛び起き、今起こったことを無視するということだった。そして、じつは僕も同じようにしたので、それは、とりあえず成功した。

「あっ、メッセージが来てるみたい」
電話のメッセージ・ランプが点灯し

ているのに気づき、僕はそう言いながら電話に出た。

「少々お待ちください、ミセス・ジョーンズ。ああ、ございました。1通届いております。お持ちいたしましょうか？」

「ええ、そうしてくださる？」

僕は、朝のこの時間帯に出来る最高に明るい声で言った。

ノックとチップのあと、ボブがその大きな封筒を開けながら近づいてきた。

「フランからみたいだ」

ボブが、ちょっと不安そうな表情を浮かべながら言った。そして、クリップどめされた僕あてのメッセージを渡しながら、その手紙を見つめた。

便せんの上で優雅に流れるようなフランの手書き文字を目で追いながら、不思議なことに、僕は、自分の心の中

にも同じような女性的な感覚が流れ込むのを感じていた。

Dear ステーシー

あんなに素敵な時間を過ごし、あなたとロバートにまたお目にかかるのが待ちきれません。

基本契約書を同封します。私の方は、もうサイン済みです。

中身を検討して問題がなければ、両方にサインして、うち1通を返送してください。

あなたの親友 フラン

「うそだろ」

ボブは、あまりの喜びにそれが信じられないように言った。

「マジかよ！」

その内容は、僕らが夢見っていたことのはるか上を行っていた。そのひとつ

の契約だけで、初期投資も、経常経費も、このコンベンションの参加費も、そしてもちろん僕のショッピングも、すべてカバーしてさらに余りあるものだったのだ。

僕らのビジネスは成功に向かっていった！ まちがいなく軌道に乗った！

その契約は、再交渉する必要もなければ、なんの後ろめたさを感じる必要もない完璧なものだった。僕らは、それについて話し合う必要さえ感じなかった。

それにつづく勝利の抱擁と素早いキスは、なんの不自然さもない、心からのものだった。

この日のショッピングは、この前とはちょっとちがった、もっと目的を持った感じになった。

例のフランとピーターとのディナー

パーティまでに、いったんブライアンに戻ることは、もはや現実的には無理だと僕は覚悟した。だとすると、明らかに、2週間と少しの間、着るための服が必要になる。

今日はもう「回収」という下心さえなかった。必要に迫られたショッピングだったのだ。でも……。

「また、顧客を一人ものにしたわよ」ブースに戻り、いつもの「あいさつ」を交わしたあと、僕はボブに向かって微笑んでいた。

僕らは、いっしょに展示をかたづけた。

コンベンションの日程はもう一日残っていたが、明日は公式イベントで、主には主催者たちのためのものだ。でも、そのために展示ブースは撤去され

るのだ。

だから、今日がこのコンベンションの最終日とも言えた。そのしめくくりとして、これから行われる「ガラ・ボール」(大規模なダンスパーティ)に、僕らは——今のキャラクターのおかげで——堂々と参加できた。

「さあ、お祝いだぞ」

部屋に戻ると、ボブは幸せそうなため息とともに言った。

ボブは、もともと一張羅のスーツを着ているのだから、着替える必要はなかったが、僕はそうはいかなかった。

もし、これを喜劇だと思っていたいなかったら、僕を待って彼がイライラしはじめたことは、深刻な事態を引き起こしただろう。

「ハニー、まだかよ。遅れるぞ！」

「まあ、典型的な男ね」

バスルームのドアのこちらで、僕はからかった。

「うむ、典型的な女だ」

ボブも、そうからかい返してきた。

どうやら、暇をもてあましたボブは、僕のショッピングバックの中をかきまわしているらしく、ドアの向こうで、僕の買い物についてあれこれ文句を言いはじめた。

化粧直しやヘアセットを別にしても、時間がかかっていたのは、僕が今日、これまでとはちょっとちがうあることをしていたからだ。

その原因は、ドアフックにかかっているエレガントなドレスにあった。昼間、連れ的女性に勧められて買ったものだ。

それは、ほんとに素敵なおドレスだった。大きく開いた背中で細く繊細なストラップがクロスし、全体は体の線に

ぴったりしたつくりで、長いすそが流れるように床まで達している。そのすそを引きずりすぎないように、僕は、ストラップでとめる5インチの黒のサンダルも買わなければならなかった。そのすそに長く入ったスリットは、挑発的にセクシーで、人目を引くにちがいない。

でも、このドレスにはちょっと問題があった。

細いストラップは、僕が隠したいほどには前の部分を引っ張り上げてくれず、乳房のかなり多くの部分を見せるようなつくりだったのだ。

じつは、その隣にももう一着、別のドレスが掛かっている。それは、「ガラ・ボール」に着るつもりで最初の日に買ったものだった。胸を完全に隠すデザインだ。

べつにこちらのドレスに問題がある

わけではないのだが、僕は、着られるものなら、新しい方のドレスにしたいと思った。もう一着の方は、だめだったときのバックアップ用として、できれば、フックにかけたままにしておきたかったのだ。

高かっただけのことはあり、今つけているブレストフォームは、信じられないほど本物そっくりだ。人に見られることを想定して作られていることはまちがいないだろう。

でも、そのためには、エッジと実際の肌との境目を隠す必要があった。

じつは、さっきから僕は、そこをパテ状のコンシーラーで埋めることに多くの時間を使っていたのだ。

その上からさらに、僕の肌色に合わせてブレンドしたファンデーションを塗り、パウダーをはたいて、その作業はやっと完了した。

そして僕は、息を呑んだ。

鏡の中に見たその姿は、こう表現する以外に言いようがなかった——僕には、乳房がある！

高いヒールの上で足首にきつめのストラップをとめたあと、僕は、そのドレスの中に体をねじ込んだ。

背中の下の方について小さなジッパーを上げ、全体を整えたところで、僕は、きつく絞めつけられ閉じられた股の間に、慣れ親しんだうずきを感じていだ。

鏡の中に全身が映ったその女性は、異常なほど魅惑的で、不安なほどセクシーだった。その姿は、僕に、ポルノを見た時のような反応を起こさせたのだ。

それは、なんだか落ち着かない居心地悪さだった。でも、一方で僕は、同じくらいうきうきもしていた。

僕は、自分がこんなにホットに見えることを楽しんでいた。

バスルームから出て来ると、ボブが「何だよ、これ？」と言った。

見ると、ボブはまだショッピングバッグをさばいていたようで、そこから引っ張り出した赤いサテンのネグリジェをぶら下げていた。そして、こちらを向いたところで、あぐりと口を開けた。

「あ、それ？ 今日、『ビクトリアズ・シークレット』ってお店で買ったのよ」

僕は出来るだけカジュアルな口調で言った。僕のCサイズの胸をぽかんと見つづているボブを無視するためだ。

「いっしょに行った彼女が、いつも、だんなさんのためにあれこれ買う店らしいのね。『この店で買う分には、カ

「怒らないのよ』って笑ってた。で、あたしもおつき合いして、買っちゃったわけ」

「俺の……ために？」

ボブは、僕を見た時からずっとつづいている上の空状態で言った。

その言葉に、僕は笑ってしまった。

「馬鹿ね。わかってるでしょ。ランジェリーストアに並んでるセクシーなアイテムは、実際には誰のためのものか？ それで、誰が興奮するのか？ それを着た女自身？」

ボブは、ボーツとした顔で何も答えず、まだ見つづけている。

それで、僕は——

「もし、あなたがあたしのおっぱいを見るのをやめられないんなら……」

話の方向を変えた。

「別のドレスに着替えたいと思うんだけど」

「……え？ い、いや！ ……ご、ごめん、ステーション。あやまるよ。君があんまり魅力的なんで、目が離せなかったんだ。君みたいにセクシーな子を見たことないなあ……なんて」

ボブは、素直に白状した。

「ありがとう」

僕は、思わず赤くなっていた。

と、ボブは唐突に向きを変え、手にしたネグリジェをベッドにのせた。確信は持てなかったけれど、その時、ボブのズボンの前の部分がつっぱっているのが目に入った。

そのあとも、ボブは、僕に背を向けたまま、ショッピングバックやその他のものをかたづけたりして、忙しく動き始めた。

どうやら、僕の視線からなにかを隠したがつているようだった。

ある意味、あけすけに見られていた

時の方が、ずっと気が楽だった。

僕らは、やっと「ガラ・ボール」の会場に来ていた。

「ボビー、離れないで」

僕は、どうやら僕自身が引きつけてしまっているらしいまわりからの視線に落ち着かず、言った。

「おや？ 君のリングが守ってくれるんじゃないかったのか」

ボブは、意地悪くそう言い返してきた。

「そばにいて。お願い」

「……ああ」

どうやら、僕の本心からの願いをわかってくれたらしい。

ボブは、僕のウエストに手をまわして引き寄せ、カクテル・ポーションの人混みを抜けた。

とはいえ、これは、お祝いだ。カク

テルグラスを重ねることで、僕の緊張は次第に解けていった。

ずっと胃を絞めつけているせいで、このコンベンションの間、僕はろくに食べていなかった。だから、酒はよく効き、早く回った。でも、それはけっして不快な酔いではなかった。

ディナーをとったのは、ダンスフロアを囲む大テーブルのひとつで、他にも四組のカップルが座っていた。生バンドが演奏するステージのすぐそばだったせいで、その席は、会話するのもむずかしかった。他のカップルたちは、早々とそれをあきらめたらしく、代わりに、ダンスに楽しみを求めはじめた。

他の人たちの楽しそうな姿を見ながら、僕たち二人だけが、会話もなく、大きな丸テーブルに座っているというのは、とても、「お祝い」にふさわし

いとは言えなかった。

「ちょっと、あそこに出てみない？」

僕は、ボブの耳に口を近づけ、叫ぶように言っていた。

「ステシー、マジで？」

ボブは、ちょっと驚いたような顔をした。

「その方が、ましでしょ。ここで座ってるなんて、なんか、馬鹿みたいだし」

ボブは、ちょっと考えるようにしたあとうなずき、立ち上がった。そして、椅子を引いてくれ、僕に手を貸してくれた。

そのそびえるヒールのせいで、僕の足は不安定だった。けれど、それはけっして悪いことばかりでもない。酒で眠くなり始めている僕の目を覚ましてくれるだろう。

二人で踊ることは、僕らが想像していたよりずっと楽しいことだった。

なんだか、世界をあざむいて、二人だけで秘密のハロウィン・パーティをやっているような気分になるのだ。僕らがずっと酔っぱらったように笑っていたのには、じつは、自分たち自身と、それを取りまくこの馬鹿馬鹿しさ全体を笑い飛ばしているというような、共犯者意識があったからだ。

ちょっと気分を落ち着かせようと言ったボブの言葉で、僕らはかえって笑い転げそうになった。

「そんなに胸を振りまわしてると、誰かをケガさせちゃうぞ」

最初のスロージョギが始めた時、僕らはまださほど飲んでいただけじゃない。でも、酔っていたのだろう。そのジョギは避けるべきだという、まともな判断が出来なかった。

それどころか、ボブは僕を抱き寄せ、

僕がいつも使うのとは反対の手をささげ持った。

いつもとはすべてが逆で僕がまともなステップを踏めなかったこと、そこに酒の影響が重なり、僕らのダンスはすぐに、典型的なスローダンス——ただ横に揺れているだけのよう——になっていった。そしてそれは、僕らの意図以上に、二人の体を密着させることにもなった。

曲が半分を過ぎる頃には、ダンスフロアで満足げな微笑みを向けるボブにもたれて揺れていることを、僕自身、心地よく感じていることに気づいた。

そして次には、他のあることにも気がついた。

僕に密着したボブのペニスが、ゆっくりと膨張しているのだ！

驚いた僕が見上げると、ボブは恥ずかしそうな目で見返し、ダンスの動き

を止めた。しかし、そのふくらみは相変わらず硬くなりつつづけていた。

「……ご、ごめん、ステーション。そんなつもりがないのに……。どういうわけか……」

僕は、それに軽くうなずいた。

ボブにそんな意志がないのはわかっていたし、そのことで、彼を責めようとも思わなかった。

それよりも僕は、それが起きたあとも、ボブが僕を放そうとしないことに驚いていた。いや、もっと驚いていたのは、自分自身の反応に対してだった。

たぶん、酒のせいなのだろう。たぶん、長い間この役に没入してきたせいなのだろう。たぶん、何度となく交わした抱擁や、ちょっとしたキスには麻痺してしまったせいなのだろう。

いずれにせよ僕は、ボブが僕に対してペニスを硬くしているのだとして

も、それをいやだとは感じていないのだ。

頭の中では、すぐに跳びすさり、抗議の叫びを上げ、シャワーを浴びに走ることを考えていた。にもかかわらず、ボブだけでなく僕までも、その興奮の証拠が膨張しつづけているという事実から逃げ出そうとしていなかった。

もしこれに、なにかの理由が見つけられるとすれば、それは、ボブをこんなふうにすることが出来たという、僕の、ある種奇妙な優越感なのだろう。

「どうしたらいいんだろう？」

ボブが、僕の耳にささやいた。

「もし、今から席に戻ろうとしたら、僕はもっと恥ずかしいところを見られそうだ」

「そう……ね。じゃあ、このままダンスをつづけて、曲が終わるところで席にたどり着くようにすれば、あたしの

体で隠しつづけられるでしょ」

「う、うん、それでいこう」

ボブは、少し明るい声になり、言った。

「……あれっ！ もうこっちを見てる人がけっこういる」

まわりを見た僕は、目に入ったままを口にした。

そこで僕らはやっと、今僕らがどんなふうに見られているかに気がついた。

ぴったりくっついてスローダンスを踊っていた二人が、動きを止め、さらに体を密着させ、小声で語り合っているのだ。

「どうやら、キスもせずにダンスを終わるわけにはいかないみたい」

僕は、笑顔を崩さない努力を払いながら、ボブの耳にささやいた。

ボブ自身の笑顔は、中途半端なもの

になり、さらにそこに、なにか他の感情も見え隠れしている気がした。

それで、僕はつぶけた。

「心配しないで。あたしは、なんとも思わないわ。べつに変な意味のないことはわかってるから。もし、正体がバレずにやりきれたら、何年か後には、あれは酒のせいだったって、笑い話にできるわよ、きっと」

それに返事する代わりに、ボブは、顔を僕の正面に移動させ、酒にのぼせ気味に見上げる僕の視線をのぞき込んできた。

その彼の顔が、ゆっくりとこちらに傾いてきた。

僕はいわば本能的に、影がかぶさり暗くなった目を閉じ、ほとんど息を止めた口を少し開き、それを待った。

一瞬、ボブのやさしい息づかいを感じ、そのあとすぐに、驚くほどやわら

かい唇が僕の唇に触れた。

もし、このキスが単なる芝居だとしたら、僕らはオスカーを受賞できるだろう。

それは、これまでのあいさつのキスとはまったくちがっていた。

そもそも恋人どうしのキスに見えることを想定していたにしても、実際にそのとおりになっていた。

唇どうしが、くすぐり合い、求め合うことで、意図も予想もしていなかった電気のようなしびれが体じゅうを駆けめぐった。

全身の肌が震え、僕は、まるで腰が抜けたようになっていた。

それは、ファーストキスに似ていた。でも、それよりもっとよかった。ファーストキスのおののきや息詰まるような興奮はそのままに、未熟さからくるぎこちなさがなかったからだ。

ボブの舌の先が、僕の従順な歯の上を、やさしく撫でていくのを感じた。同時に、僕に押しつけられた鉄のように硬いベニスがぴくっと動いた。

押しつぶされ隠された僕自身のものは、窮屈なライクラ刑務所(※)の中で無益な抵抗をつづけていた。

(※訳注：Lycra 伸縮性の強いポリエステル繊維の商標)

内なるブライアンの抗議を無視し、この流れに身をまかせたいという思いはやまやまだったけれど、僕は、なんとか唇を離した。でも、僕の目は、ボブの視線に釘付けになっていた。欲情を湛えたその目つきは、僕自身の目つきの反映に他ならなかった。

そう感じながらも、僕は、ふたたびダンスをつづけようと、体を揺らしはじめた。

そこでふたたび感じた小さな動き

は、僕ら二人にとってさらに重大な意味を持つものだった。

強く押しつけられている部分に、まぎれもない、リズムカルな振動が伝わってきたのだ。

「足を、止めないで」

僕は懇願していた。そうしないと、僕らはもっと多くの注目を集めるはめになりそうだった。

でも……、体を揺らしていること、僕自身の興奮、僕に向かって射精してくるボブのペニスの感触、そしてなにより、そのボブを絶頂に達しさせたのが、他ならぬ僕自身なのだという動かしがたい事実……それらすべてが襲いかかり、僕は耐えられなくなっていた。

必死で何食わぬ顔を装い、ダンスをつづけようとしていたが、そこで、僕自身のオルガスムの身震いが、僕の体を控えめに支配した。

たぶん、他の人には気づかれなかったと思うが、ボブは気づいたようだ。どこか気が楽になったという感じのその微笑みで、それがわかった。

「イーブンだね」

僕をテーブルまで誘導しながら、ボブは短くそうつぶやいた。

「お化粧を直しに行きたいんだけど」

ボブの隣に腰掛ける代わりに、僕は言った。

ボブは、濡れて染みになった前の部分をテーブルクロスで隠し、しばらくそこにじっとしているつもりらしかった。

僕の方は、それを後ろに折りたたんでいるぶん、濡らしたのは股下で、まだ隠されていた。座りたくなかったのは、ドレスを湿らせたくなかったからだ。

ところが、会場のトイレから戻って
くると、そこにボブはいなかった。

「彼、膝の上に飲み物をこぼしたんだ」

同じテーブルの人が言った。

「で、部屋に行って着替えるって、伝
えてくれってさ」

「どうもありがとう」

僕はそう言ってから、ハンドバッグ
を手にし、その場に別れを告げた。

部屋に戻ると、バスルームから排水
音が聞こえてきた。

「ステーションか？」

ドアの向こうでボブが叫んだ。

「ええ、ボビー」

「最高だ」

照れ隠しの言葉のあと、石けんを泡
立てる音、そして、シャワーの音がつ
づいた。

酔っていたし疲れてもいたので、僕

はすぐにも横になりたかった。でも、そこで、ベッドの上にまだ、サテンの赤いネグリジェが掛かったままなのに気がついた。

今着ているドレスと同じように、そのネグリジェの細いストラップは、胸を多く見せるデザインだ。

単純な好奇心は別にしても、まだ、見せてもいい胸を持っている今、いつものTシャツとショートパンツを着るのは、なんだか味気ないような気がした。

ジッパーを降ろし、ちょっと体を揺するだけで、魅力的なドレスは、足もとに落ちた。セクシーな超高層サンダルのストラップをはずし、ストッキングを滑らせて脱ぎ、それから、そのサテンのネグリジェに腕を通し、シルキーなレースの生地を体に沿って下ろした。

このあと、湿ったままの下着もかえずに寝る気はない。このネグリジェが僕の体のカーブの上でどんなふうに見えるのかも、バスルームの姿見で確かめたい。もちろん、メイクやアクセサリを着けたままで眠るわけにもいかないだろう。

でも、僕は、その姿に興奮していた。今の僕は最高にホットに見えるちがいない。あのドレスでセクシーに見えたというのなら、体の線の浮き出すこの赤いサテンにメイクと宝石類で飾った今の姿は、いわばセックスそのものだろう。

僕はがまんできずに、壁の鏡の前でいくつかのセクシーなポーズをとっていた。さらに、ベッドカバーをはずして、その上に肘をついて寝そべり、鏡に向かって「早く来てえ」というフィンガー・ウェーブさえした。

その姿は、さらに僕を興奮させたけれど、一方で、その興味を持続できないほど、疲れもピークに達していたようだ。

僕は、バスルームの順番を待つ間、ちょっとだけ目を閉じていようかと思った。

目を覚ますと、朝の太陽の光で、室内は明るくなっていた。

ベッドのラジオアラームから、ゆったりした音楽が流れていた。それが鳴り始めてから、すでに一時間以上が経っているようだ。

僕は、ボブがいつベッドに入ってきたのかさえ覚えていなかった。

でも、彼は僕の横にいて、しかも片手で僕を腕枕し、もう一方の手は僕の体の上に乗っていた。つまり僕を抱くような形で寝ているのだ。

僕の耳のそばで軽いいびきを立てるその姿は、かろうじてボクサーパンツは穿いていたが、シャツは着ていなかった。

僕はどうやらひどい二日酔い状態には陥っておらず、昨夜と同じように、鏡に映った自分の姿を見つめていた。

その映像は、驚くことに「ノーマル」に見えた。

ボブの体は僕より大きく、しかも鍛えている。

筋肉質なその体型とちょっと無骨な顔は、彼の腕の中に抱かれている小さくてセクシーな女の子と好対照だった。

と、そこで、ボブがかすかに動いた。目を覚まし、さっきの僕と同じように、僕らが今とっている体勢に驚いたようだ。

でも、あわてて飛び起きるようなこ

とはなかった。

「おはよう、ハニー」

ボブは、その朝の儀式を、これまでよりちょっと強く押しつけるようにしてきた。

「おはよう、スィーティ」

僕の方も、そのやさしいキスに応じて、ボブに笑いかけた。

ボブは、ゆっくりと静かに体を起こし、ベッドを出た。

「これでやっと、君は、共同経営者に戻れるわけだね」

ボブが言った。

「君がブライアンって奴をつかまえ直してる間に、僕がブースの展示品を荷造りしとくよ」

「あのさ、ボビー」

「ん、なに？ ステーシー」

「それが、そうもいかないみたいなんだ……」

僕はそこで初めて、フランとのイブニングの約束のことを話し、それによって生じた状況について語った。

二週間後にまたエクステンションを施し、髪を今の状態に戻すのはかなり面倒だということ。いずれにせよ、この二週間、僕は、今のようない眉を維持せざるを得ないのだということ。それらについて、ボブに説明したのだ。

だからもうしばらく、僕はステーションの罫から抜け出せないのだと話すと、ボブは、さほど動ずる様子も見せず、うなずいた。

「なるほど。それであんなに服を買ったわけだ」

着替えをはじめながら、そう言っただけだった。

僕らは、その日、コンベンションの

閉会式を欠席した。でも、それはなんの問題もなかった。すでに期待した以上の成果を手に入れていたし、あとは、荷造りして帰るだけでよかったのだ。

僕らは二人とも、あのダンスフロアで起こったことや、この朝どんなふう
に寝ていたかということにはいっさい触れなかったが、けっしてそれらを忘れたわけではなかった。

地元に戻ったところで、僕は、しばらくの間、ボブのところではいっしょに暮らすことを提案し、ボブもすぐにそれを納得した。それは、ボブの部屋に女性らしさをつけ加える作業のためだった。フランとピーターの訪問に備え、僕らの「芝居」とキャラクター設定を、説得力あるものにしておく必要があったのだ。

フランと、例のもう一人の女性から

の注文で、他の見込み客に再営業をかけるまでもなく、僕らが用意した商品在庫はすべてはけてしまった。

その出荷や再仕入れの忙しさの合間を縫って、僕は、カタログを物色したり、店に立ち寄ったりして、あれこれを買集めた。その結果、ボブの部屋は、少しずつ女性的な色合いを増していった。

枕やベッドカバー、カーテンやラグ、ドライフラワーやポプリ……僕はダイニングルームをコーディネートし、ベッドルームをアップグレードした。

新たに買ったクイーンサイズベッドは、あのホテルのキングサイズより小さかったものの、まあ、問題なかった。寝る時、手の置き場に困ったり、脚どうしが触ったりはしたものの、あの朝のような「愛撫」の体勢になることはなかった。

朝のキスも、夫婦を演じて暮らすためのいわば儀式のようなものになっていった。

そんな中で、僕は、いつの間にか「女の義務」を負わされる形になっていた。それは、まあ、「向き不向き」というようなことによるものだ。

ボブは、ベッドカバーや枕のデザインなどに関心はなかったし、ベッドがぐちゃぐちゃになっていても気にとめない。だから、ベッドメイキングは僕がやらざるを得なかった。

家具のデザインや配置と収納の効率というようなことも、僕の方がずっと敏感だった。だから、掃除機をかけたり、ちりを払ったり、バスルームを清潔に保ったり、台所の細々したことなどは、僕の仕事になった。

ドライクリーニングが必要な服のほとんどは僕のものだったし、家で洗え

るものにしても、ボブにめちやくちやにされてはかなわないと思った。

部屋の模様替え、料理、掃除、洗濯、そしてビジネス……。そんなことで忙殺されるうち、二週間はあっという間に過ぎてしまった。

フランを迎える準備がまだじゅうぶんにできていないと感じていた僕は、彼女から延期の電話が入った時、正直、ほっとしていた。

「ごめんね、ステージー」

電話の向こうでフランが言った。

「もう一カ所、行かなきゃいけないところが出来ちゃって、今週は無理そうなの。来週ならだいじょうぶだから、申し訳ないけど、ちょっと予定を延ばしてくれる？」

「ええ、フラン。ちょうどよかったわ」

僕は、準備の時間が稼げることを喜

びながら言った。

「あたしたち、今週、新しいオフィスを立ち上げることになったの。だから、けっこう忙しくって」

「へえ」

彼女は、驚きと喜びを声にした。

「それは、よかったわね。おめでとう！

でも、じゃあ、あんまり早く行くとおじやまになっちゃうわね。ゴタゴタがかたづくまで、もう何週か待ちましようか？ 私としても、ゆっくり会いたいし」

「ええ、そうしてくれるとうれしいわ」

その結果として僕がどんな状況に置かれたのかに気がついたのは、受話器を置いたあとだった。準備の時間を稼ぐことしか頭になかった僕は、あとまるまる三週間、ステーションとして生きることになっていた。

「うん、そうすればいいさ、ステーション」

そのことを報告すると、ボブはまた、なにごとでもないという感じでそう答えた。

もしかしたらボブは、僕が妻の役をしていることを、快適に思い始めているんじゃないか。そんな気がしたが、僕は、それを責めたりはしなかった。

洗濯女やコックやメイドや家政婦の役割は、べつに強制されているわけじゃなくて、僕が自分から買って出ているのだ。たとえば、僕とボブで男と女の役が逆だったとしても、そういうことに慣れてる僕の方が、それをしている気がする。

ただ、僕がステーションになっていることで、僕の行為が、ボブのために奉仕している感じで受け取られ、あたかもそれが僕の義務のようにとらえられ

ている気はした。

でも、僕は、そんなことをほじくり返したりせず、それらのことをこなしつつけた。

ビジネスの方は、成長しつつけていた。たとえば、フランからの新規客の紹介がなかったとしてもだ。

僕は、そのお礼のために、しばしば彼女に電話をし、また、かわいい便せんに手書きした手紙を添えて花を贈った。そのために、女性らしい文字を書く練習をしたりもした。

その他の見込み客も、多くが取り引きをはじめてくれた。

その結果、すぐに、ボブと僕だけでは手が回らなくなった。

「人を雇った方がいいわね」

僕が提案すると、ボブも同意した。

そして、間もなく、僕らのもとの、

3人の従業員が働くようになった。

べつに、そう決めたわけではないのだが、彼らとともに働くうち、ボブと僕の間、仕事上の役割分担が出来ていった。ボブは経営計画の策定や財務、商品の仕入れなどを担当して「内勤」が増えていき、僕は「外まわり」が中心になった。フランや、彼女が紹介してくれた客、そして、一件を除いて他のすべての顧客が、もともとは、僕のルートで獲得したものだからだ。僕は、いわば「会社の顔」になっていた。

何週間かが瞬く間に過ぎた。

僕の爪は伸び、もうつけ爪でなくてもよくなっていた。ピアスの穴は、完全に定着したようだった。ヒゲを剃らないことにすっかり慣れてしまった僕は、レーザー脱毛はとりあえず避け、

家庭用の電気分解機でまばらな毛を処理していた。

他にも、慣れたことはいろいろある。ヘアセットとメイクは、毎朝の習慣になったていた。頭の中でものを考えることさえ、ステーションの声と言葉でするようになってきた。この服や胸や長い爪は、僕の立ち居振る舞いに、女らしさを強いていた。ハイヒールで歩くことが普通になった結果、それを履いていないときでさえ、無意識のうちにつま先立ちしていたりするのだ。

「なんで、背伸びしてるんだ？」

「あっ、ハイヒールの時の癖みたい。ぜんぜん気がつかなかったわ。……痛ッ！」

かかとを降ろそうとすると、実際に痛みが走った。

「靴のせいで、アキレス腱が縮んだのかもかもしれないな」

ボブは、ちょっと心配そうに言った。
「そうね。ストレッチとかした方がいいかもね」

僕も、そうにちがいないと思い、言った。

そう思うしかなかった。そう思うしかないほど、信じられないことがあれこれ起こっていた。

ステーションになって以来、僕は、あばら骨を押しつぶすほどきついコルセットの感触が好きになり、昼も夜もそれを着けつづけている。きつく抱きしめるように支えられることで、気持ちまで支えられている気がした。それをはずしていると、精神的に不安になったりもするのだ。

それ自体がボディにくびれをつくり、ハチのようなウエストにするということはもちろんだが、それによって

いつも胃が押さえつけられている僕は、まるで小鳥のような分量しか食べられなくなっている。もともと小柄でやせていたのだが、コルセットをつけることで、僕は、知らず知らずのうちに体重を落とし、女の子のようなプロポーションになっていた。

肺活量が制限され、思いきり息が吸い込めないということもさほど気にならなかった。横隔膜を使った呼吸は出来なかったが、じつは、胸式呼吸によって「胸がもち上がる」感覚が好きだった。

そして、前のコルセットを卒業し、もう一段小さいサイズのに変えた時も、なんだか気持ちいが浮き立った。

でも一方で、コルセットをとっても僕の体型がそのくびれを保っていることに不安がないわけじゃない。

僕は、こんな変化が永遠のものだと

は思いたくなかった。僕は、「萎縮」という単語を、僕の後背筋や横隔膜と結びつけて考えないようにしていた。

僕のけっして評判のよくはないショッピング・トリップの結果、僕はまた新たな顧客を一人獲得し、彼女の家に招待された。

フランとのディナーの前に挿入された数週間のおかげで、その頃までには、僕はボブの部屋の模様替えを終えていた。僕は、それをけっこううまくできたと思っていた。だからだろう。気がつくと、僕はその女性の「dDor」(訳注：インテリアのブランド)と、僕の「仕事」のデキを比較していた。そして、そのデキは、けっして負けていないと自信がもてた。

ただ一点を除いては。

「写真よ、ボビー。写真がないわ！」

「なんだって？」

「既婚者は、写真を持ってるものよ。バケーションの写真、子どもの写真……。少なくとも、結婚式の写真は、必ず飾ってるわ」

「たしかに、僕らは写真なんてないけど……。でも、ステージー、それを誰が気にするっていうんだ？」

「女よ、ボビー。フランは、ぜったいに気づくわ」

「じゃあ、何か理由を考えればいい。写真は、壁から落ちて破れちゃいました。なっ、これで危機は解消」

「そんなのダメよ。女はふつう、それを焼き増ししてるわ。家族や友達に配ったコピーからだってもう一度焼き増しできるわ。一枚の写真が破れたなんて話は、意味ないのよ！」

「落ち着けよ、ステージー！ なにも、

世界の終わりってわけじゃないんだから」

ボブの言葉で、僕はやっと、ちょっと正気にもどった。たしかにそれは、そんなにパニックになるほどのことじゃないだろう。でも、僕は、なぜ僕がそんなふうになったかは、よくわかった。

あれだけの努力、あれだけの苦勞、あれだけの出費、そして、あれだけの個人的犠牲を払ったのだから、この奇妙な仮面劇は「完璧」でなければいけない。

僕は、そう思っているのだ。

そしてそこで、さらに、とんでもなく奇妙なことが起こった。

僕は、泣いていた。

どうしてそんなことになったのか、自分でもよくわからなかった。でも、僕は、自分自身どうすることもできな

かった。

精神的にも、肉体的にも、そして感情的にも、僕は疲れ果てていた。

もう限界だった。

だから、僕は泣いていた。まるで女の子のように泣きつづけた。泣いているということが、さらに僕を泣かせた。

そんな僕の反応に、ボブはひどく驚いたようだった。

僕の肩を抱くようにして、しばらく僕を見つめた。

「ごめん、ステシー。それがそんなに大事なら、写真を撮りに行こう」

「……マジ……で？」

僕は、目をしばたかせながら、引きつった笑顔できいた。

「ほんとにそうしてくれるの？ あたしのために？」

自分の口からそんなわけのわからない言葉が出たことに、そして、そんな

女っぽい反応をしていることに、僕は内心、おぞけを震う思いもしていた。

でも、僕の波打つ胸は、僕自身を制御不能にしていた。

「君のためならなんでもするよ、ステシー。なんでも」

次の日の午後、僕は、あるブライダルショップのチェーン店にアポイントを入れた。

ボブの方は、タキシードを借りに出かけた。

その女性だけに許された世界に足を踏み入れたとき、ステシーという役を演じているのだという意識が残っているぶん、僕はなんだか落ち着かなかった。でも、ウエディングドレスの試着が始まると、そんな気持ちは、すぐどこかにいってしまった。

それは、なんだか現実に思えなかつ

た。

僕はまるでお姫様のように見え、実際、そんな気分になっていた。

そんな気分を受け入れがたい気持ちもどこかにあったが、でも僕は、まちががなくそれにわくわくしていた。

着るドレス着るドレス、すべてが気に入った。でも、販売員の女性が言うことが正しいのがやがてわかった。僕は、僕のためのただひとつのウエディングドレスを見つけていた。

三面鏡の前に立ち、僕は、小さな吐息を漏らした。

その販売員の女性が、背中に並んだ小さなボタンの最後のひとつをとめたのだ。つづいて僕は、サイズを調べるため、見本のサテンのパンプスに足を入れ、もう一度鏡を見た。

それは、シンプルだけれど驚くほどエレガントな、体にぴったりしたドレ

スだった。バスチェのような上半身は、コルセットをした体の線に沿い、まるで第二の肌といった感じだった。そこから下に向かって流れるラインは、僕の体のカーブを浮き立たせ、さらに数フィート、背後の床の上にトレーンが延びている。

上半身のビーズ刺繍は華麗で、生地も豪華だ。

もしかすると、僕が目になにかがたまってくるのを、販売員の女性は気づいたかもしれない。

彼女はひじのところまである手袋を着けてくれ、シンプルなベールをかぶせてくれた。そして、造花のブーケを手渡すと、鏡の前から退いた。

僕は、花嫁だった。

「すごく、きれいですよ」

販売員が、そう声をかけてきた。

なんだか感情が高ぶってくるのを感じ

じ、僕はこみ上げてくる涙を必死に抑えようとしていた。

「ティッシュがいらいますね」

彼女がやさしく言った。

僕は、声を出せば、そのダムを決壊させてしまうような気がして、ただうなずいた。

ティッシュの箱を渡してくれたあと、彼女はそっと部屋を出て行き、鏡の前の僕を一人にしてくれた。

僕は幸運だった。ドレスは僕のサイズにぴったりで、手直しする必要もないようだった。

と、そこで、壁際に置いた僕のバッグの中でベルが鳴った。

僕はトレーンをまとめ、試着台を降りて、携帯電話に出た。

「どう？ うまくいってるかい？」

ボブだった。

「ええ」

僕が答えられたのはそれだけだった。

「こっちはタキシードを手に入れて、そのあと、急ぎで現像してくれるカメラマンを見つけたぜ」

「ほんとに？」

「ああ、土曜日に撮れば、日曜日にはプリントを仕上げてくれるそうさ。なんなら、今からだって撮れると言ってる。こっちの準備ができればって話だけどな」

「準備は、できるわ」

電話の向こうで、ちょっと沈黙があった。

「……ステーション、マジで？」

「あたし、もうドレスを着てるもん」

「じゃあ、そこで待っててくれ。僕も借りたタキシードに着替えなきゃいけないから。でも時間がないな。そうさ、車を雇って迎えに行かせるよ」

「自分で運転できるわよ。ボビー」
「ウェディングドレスじゃ無理だろう。
1時間後でいい？」

「オーケー」

「よかったな」

「あなたは？」

「もちろん」

「ありがとう」

また出かかった涙をこらえて落ち着こうとしていると、そこへちょうど販売員の女性が戻ってきた。

「これをいただくわ」

「ありがとうございます。じゃあ、さっそく脱いでいただいて、それから…
…」

「ちょっとふつうじゃないかもしれないけど、あたし、このまま着ていきます」

僕は彼女の言葉をさえぎってつづけた。

「1時間で、靴やアクセサリーが揃えられるかしら？ それから、ヘアやメイクも」

何をしているのかよくわからないうちに、僕はレースのストッキングを履き、それがブライダルガーターでとめられた。新品のサテンのパンプスに履き替えているところで、近所のフラワーショップの女性が駆けつけた。彼女は、僕の髪を、ほのかな香りを放つ輝くような花で飾ってくれ、ふたたびベールをかぶせてくれた。別の女性は、グロッシーなリップカラーで、僕のメイクを仕上げていた。さらに、五連のパールネックレスと、やはりパールのイヤリングをつけてくれている人もいた。

香水を軽くスプレーしたあと、本物の花のブーケを渡され、僕はふたたび

鏡を見た。

「ああ……」

僕は、思わずつぶやいていた。

「あたし……お嫁に……行くんだ」

支払いを終える前に、一台の白いリムジンが到着した。

何も言わずに後部ドアを開けた運転手は、直立不動で待っていた。

女性たちは、口を揃えて僕をほめながら、僕が着てきた服やバッグや小物類を大きなショッピングバッグにつめていた。そのバッグを受け取った運転手は、手を差し出し、僕が乗り込むのを助けてくれた。

車が向かったのは、すぐ近くの教会だった。そのエントランスの前に、タキシード姿のボブと、セッティングを終えたカメラマンが待っていた。

「ステーシー、びっくりするくらいきれいだ」

ボブは、我を忘れたようにそう言ってくれた。

それは奇妙なことだった。一面では素晴らしかったけれど、もう一面では、どこか空虚な感じは否めなかった。

急いで教会の階段の下まで行った僕らは、たまたま通りかかった通行人に頼んで、ライスシャワーを振りかけてもらった。

そのあとも、カメラマンはいろんな設定の写真を撮った。リムジンの前に立つ二人。リムジンに乗り込んだ2人。リムジンの中でシャンパングラスを交わす2人。

近くの公園へ行って、カメラマンの指示に従い、美しい観光地を眺める2人という設定の写真を撮った。最後に撮った写真は、湖上に沈む夕陽を眺め

ているということになっていた。

僕らには、写真の送り先リストを点検する必要もなければ、パッケージのバリエーションを選ぶ必要もなかった。

ボブは、シンプルかつ手早く注文した。すべての写真を2枚ずつポートレートサイズに、そしてお互いのパス入れ用に2枚だ。馬鹿げたほど高い代金を請求されたが、二日後には、写真が届く。

ボブの車は教会に置いていくことにしたし、僕の車はブライダルショップに置いたままだったので、帰りのリムジンの中で、僕らは無言でシャンパンをすすっていた。お互い、なぜか、それぞれの思いに沈みこんでいた。

ドアを開けてくれた運転手と手を貸してくれたボブの助けでリムジンを降

りると、運転手はボブにショッピングバッグを手渡し、車は去っていった。

アパートの建物に入ったところで、ボブが言った。

「ちょっと、ここで待ってて」

彼は、階段を駆け上がると、自分の部屋の中にショッピングバッグを投げ入れた。

そして、ドアを開けっ放しにしたまま、また階段を駆け下りてきた。

「俺の花嫁に、歩いて入らせるわけにはいかないだろ」

そう言うと、僕の脚に腕をかけ、それを払うようにして、抱き上げた。

「あっ……、ボビー」

僕は、驚いた笑顔で彼を見つめ返していた。

ボブは、軽々と僕を運び上げ、部屋の入口を入ると、足でドアを閉めた。

ボブの腕の中で、僕はそれを当然の
ことのように受けとめていた。心が落
ち着き、安心に守られている気がした。

ところが、ボブは、そこで僕を降ろ
さず、そのまま、ベッドルームまで運
んだ。そして、僕を、ベッドの上にそ
っと降ろした。

「ステーシー、ずっと、こんな時を待
ってたんだ」

ボブは、そう言いながら、僕の方に
体を傾けてきた。

僕らは、突然、あのダンスフロアに
戻っていた。

でも、今度は、酔っぱらってはいな
かった。芝居しているのでもなかった。

ボブは、自分の気持ちを確かめるよ
うにゆっくりと唇を押しつけてきた。
僕の唇も、それに応えていた。

お互いの唇が求め合いつづける中、
ボブの靴が床に落ちる音が聞こえた。

そして、その体重がベッドに沈み込むのを感じた。

ボブの舌が口の中に入ってきたとき、そこにはもう、なんのためらいも尻込みもなかった。

僕の内なるブライアンは、今や沈黙し、その瞬間を受け入れていた。僕がステージーとして、その夫からのキスを受け入れる瞬間を。

ボブは、その鍛えられた逞しい手を僕のドレスのすそへと運び、レースのストッキングに包まれた脚の上を這わせはじめた。

唇を僕の頬の上に走らせ、耳たぶを軽く噛んだあと、今度はそれを首筋へと移動させた。

僕はもう、それだけで耐えられず、体をのけぞらせ思わず声をあげていた。自らの耳に届くその声は、ステージーの声だった。

僕に押しつけられたボブのタキシードのズボンの中に、硬いかたまりを感じた。

僕は、華奢な指先をそこに這わせていた。僕の手の下でボブのペニスがさらに大きくなるのを感じ、僕は、おずおずと、そこを握りしめていた。

まだ唇を強く合わせたままの状態、ボブは、僕の口の中に向かってあえいだ。

「ああ～、感じるよ、ステーション」

お互いの舌をからめ、探り合いながら、ボブは言った。

僕にはもう、何が正しいとか、何をしているとか、そんなことはどうでもよくなっていた。なぜ僕はこんなふうに感じるのか、なぜこんなことで興奮するのか、なぜ奮い立つボブのペニスを見たいと思っているのか……その理由を知りたいとも思わなかった。

ただ、今の僕にわかっているのは、僕の手の中でボブのペニスが硬くなるのがうれしいということ、そして、ズボンの生地がその喜びをじゃましているということだった。

ボブの手で愛撫されつづけ、お互いの舌をからみ合わせつづけ、僕は、熱に浮かされたようにボブのタキシードのブッシュベルトをはぎ取り、ズボンのボタンをはずしていた。そして、なんの恥ずかしささえ感ぜず、ボブのボクサーズパンツの中に手を滑り込ませた。僕の細い指で包むように持つと、ボブの肉棒は、さらに熱く、さらに硬くなった。

ボブのうめき声は、同じようにエクスタシーの高まりにもだえながら漏らした、僕の声と混ざり合った。

さらに次のことを求めた僕は、いったんその手を離し、ボブを仰向きにさ

せた。僕の長い爪が、ボブのサスペンダーにかかり、それをはずした。ボブは腰を浮かし、ズボンとパンツを一度に下ろすのに手を貸してくれた。

その輝かしいペニスは、解き放たれ、天井に向かっていきり立つように弾んでいた。

「輝かしい」という言葉は、このためにあるのだろうと僕は思った。

これまでの人生で、僕は、自分自身の情けないものを、標準だと思って使ってきた。

それに比べ、ボブのペニスは、均整のとれた彫刻のような体の上で、巨大に、誇り高く、力に満ちてそびえ立っていた。それは、ほとんど、畏怖や崇拜の対象に値するものだと、僕には感じられた。

その先で、ビーズのようにきらきら光るしずくが一滴、こぼれ落ちそうに

なっていた。不思議なことに、その一滴が、僕のさみしがりやの赤い唇を呼んでいる気がした。

とても実際に起こっていることだとは思えない、非現実的なことだった。でも、僕は、ボブのペニスの先に自らの唇を触れ、さらにそれを開いて、包み込んでいった。

その一滴の味は、僕の欲情をさらに煽った。

拘束された僕自身のペニスは、その狭い牢獄の中で身もだえていたが、体全体に欲望がうずいた。

僕は、ボブのシャフトをふくんだ口をゆっくりと下ろしていきながら、僕のしていること自体に、そして、こんな太いものをくわえても息がつかまらないことに驚いていた。

ボブのペニスが、僕のもの奥に当たった。それで僕は、いったん首をも

たげ、もう一度さらに深く下ろした。

咽頭いっぱいに広がったボブのペニスは、今度こそ僕の呼吸を止めた。僕はふたたび頭を上げ、少し空気を吸い込んでからもう一度下ろした。

ボブの太くて硬いペニスが、僕の小さな口とのどを満たした。鼻孔を通した呼吸さえむずかしくなっていたが、それでも僕は、そのリズムミクな上下動をやめなかった。

僕は……あたしは……女。

そう感じることで、僕は、自分自身のクライマックスの危険領域に近づいていた。

「待って」

突然、ボブがそう言い、僕の体を起こした。

「そんなのはダメだよ。俺たちの初めての夜……新婚初夜なのに、そんなのじゃダメだ」

ベニスから引き離されたことにうずくようなさみしさを感じながらも、僕は、僕の……あたしのボビーが、カフスとシャツのボタンをはずすのを見ていた。

裸になったボビーが、そんな僕の上に覆いかぶさってきた。

「このままで……、して」

ボブがウエディングドレスを脱がそうとしたところで、僕は短くそう言っていた。そして、ナイトテーブルの上にあった爪用のはさみをつまみ上げ、彼に手渡した。

「それで、ここを……」

そう言いながら、ドレスのすそをたくし上げ、こうつけ加えた。

「気をつけて、ね」

僕のお尻のあたりから、ジョキジョキと布を切る感触と音が伝わってきた。

僕の……あたしの夫、ボビーは、そのはさみを放り出すと、位置を変え、僕の両脚を抱え上げた。

未だサテンのパンブスを履いた足先を突き上げ、ストッキングの上までまくれ上がったドレスを着たまま、僕のそこは、ボブのものに向かってさらされていた。

僕の下着にたった今開けられたその穴のところに、ボブは、誇り高きペニスをあてがってきた。

その先から出た液のせいでつるつるした熱い肉の先が、僕の括約筋を探り当てた。

ゆっくりと、ボブはその体重を、僕の中に向かってかけてきた。その容赦ない力のなすがままに、僕のそこが開いていく時、涙がこぼれる落ちるのを感じた。

痛かった。でも、その激しい痛みは、

それと同じくらいの悦びを伴っていた。これまで一度も感じたことのないセンセーションが体を貫いた。

……もっと、来て！

僕は……あたしは、そう望んでいた。

ボブの体がふたたび覆いかぶさり、僕は、満たされるのを感じた。ボブのペニスは、僕の中にすっぽりと入り込んでいた。

その感覚に、僕は泣いていた。でも、けっしてそれがいやだからではなかった。

僕は愛されていた。

僕は犯され、貫かれていた。僕の……あたしのボビーのもので。

あたしは……女。

ボブが、ゆっくりとそれを引き抜きかけた時、耐えられないほどの空虚さが僕を襲った。でも、すぐにボブが戻ってきたことで、僕はふたたび満たさ

れた。

ゆっくりと、しかし容赦なく、ボブがそれを抜き差ししはじめ、そのペースが徐々に速まっていった。

信じられないほど長さを増したそのペニスを、できるかぎり深く受け入れたくて、僕がボブの動きに合わせて腰を振り始めると、僕ら二人のもだえ声は、さらに大きく響き合った。

ボビーの動きはピストンのように速くなり、まるで僕の体をマットレスの中へ打ち込むとでもいうように体全体をぶつけてきた。その熱狂の下で、ベッドがぎしぎし音を立てた。

「ステーション。あい……し……てる」
「あー、あ、あっ、ホビー。あっ、あ
たし……イキそう……」

言ったときには、すでに遅かった。

ボブのペニスが、僕の奥深くで爆発するのがわかった。次々に発射され注

ぎ込まれる精液が、まるで溶岩のように僕の内部を責め立て、僕はそのリズムに合わせてそこを絞めていた。

体全体をわしづかみするようなオルガスムが、僕のすべての感覚を粉々に砕いた。

パンティの股の間に後ろ向きに自分自身の発射が起こっているのに気づき、僕は、ボブの脈打つペニスに完全に抑え込まれ支配されている自分を感じていた。

ボブのペニスがゆっくりとしぼみ、出て行くときは、本当に悲しかった。さっきまで彼が存在した場所に、ぽっかりと穴が空いてしまったような感じにとらわれた。事実、伸びきってしまった僕のそこは、ボブの精子をとどめておくことができず、股の間にそれをしみ出させていた。

今、僕は……あたしは、ボブに抱か

れたんだ。ボブに、セックスされたんだ。

まだ僕の上に覆いかぶさったままのボブは、自分の唇を僕の唇に近づけ、静かに重ねてきた。

そこにはもう、猛るような性急さも、煮えたぎる欲望もなかった。

そのやさしさに満ちた唇は、いたわるように、僕の唇を癒した。

「愛してるよ、ステージー」

「愛してるわ、あたしの……だんな様」

ボブは、僕の隣に横たわり、僕たちは静かに眠りに落ちた。

翌朝、僕らの間のことがらは、大きく変わっていた。

ある意味不自然なことなのだけれど、そこにはなんの不自然さもなかった。

おはようのキスは、習慣でも演技で

もなくなっていた。

合わせた唇や、触れあう体や、交わしあうまなざしの間には、慈しみと愛があった。

昨夜、僕らがしていたことに対して、語り合うことも、ましてや疑問を持つこともなかった。僕らは、そんなことは飛び越してしまっていた。

その代わり、僕らの間には、興奮と希望の感覚や、疑う余地のない信頼があった。

そこには、新婚のような雰囲気と、性的な高まりへの期待感が満ちていた。

フランとピーター夫婦を招いての素敵なホームパーティが催される頃までには、ボビーと僕は、何度も夫婦としての心のこもった交わりを持ち、完璧にお互いの役になりきっていた。

そして、そのパーティが終わり、二人を送り出した時、ボブは、どこか悲しげな顔をした。

「……ついに、すべて終わったな」

ドアを閉めながら、ボブは、平坦な声で言った。

たしかに、これで終わりだった。

僕も、少し前から、そのことについて考えていた。今、僕がステーションでありつづける理由は何もない。まだボブには話していなかったけれど、僕らのこの仮面劇を終わらせるためのプランを話すべき時が来たのだろう。

もちろんそれは、そんなに簡単なことではない。ことに、すでに会社に社員がいることや、また、取引先のルートのひとつがステーションがらみであることを考えるとなおさらだ。

僕は、不治の病か不慮の事故を擬装し、ステーションを葬り去ることを計画

していた。

眉が生えそろい、以前の男の体重を取り戻すため、僕がアパートに隠れている間は、とりあえず僕の代わりに臨時の従業員でも雇えばいいだろう。

そして、ほとぼりが冷めた頃、僕はブライアンとして「雇われる」のだ。たぶん、誰も僕がステーシーだと気づかないだろう。

どう考えても、僕はブライアンに戻らなければならない。そもそも、ステーシーなどという名の女性は存在しないのだから。

これは、会社を軌道に乗せるための芝居に過ぎなかったのだ。一時的なことなことだ。

妻としてのボビーとの交わりも、予想外に成功してしまった実験……それとも、まあ、ゲームのようなものだ。そして、それは、僕がブライアンに戻

れば、まちがいなくつづけていくことはできないものだ。

でも……。問題は、僕がそのゲームを好きだということだった。

僕は、それが嫌いじゃない。ステーションであることが好きだ。ボビーの妻であることが好きだ。

僕は、女であることが好きだった。

ボビーの前に立ち、その顔を見つめた瞬間、そんな考えがよぎり、僕は混乱し、泣きそうになっていた。

もし僕がここで、ブライアンの声で答えれば、そして、これ以降それをつづけるなら、もう元には戻れない。

僕の頭に、口紅を拭き取り、ハイヒールを脱ぎ捨てている場面がよぎった。そのあと、バスルームで髪を切り、脱色している図を想像していた。

「楽しかったわ」

僕は、ステーションの声で言っていた。

「フランとピーターって、ほんとにいい人たちね。またすぐに、お招きしましょうね」

僕がこれまでの線に沿ったセリフをつづけていることがわかり、ボビーは、じっとこちらを見返してきた。

その頭の中でも、さまざまな考えが交錯しているのが見て取れた。

「迷ってるんだね」

ボブは、心配そうに言った。

「ボビー、あたし、どうしたらいいのか……」

僕は、ポフの前で、弱々しく立っていた。これまでになく傷つきやすい自分を感じていた。

「いいじゃないか、ステーシー」

ちよつとの間、考えるようにしたあと、ボブはそう言い、そのやさしい腕の中に僕を抱き寄せた。

僕の迷いはさらに激しくなってい

た。

一方の僕は、ボブの口から「もう少しだけつづけてみよう」とか「とりあえずの間は」とか「なりゆきを見てみよう」とか、そんな言葉が出ることを期待していた。でも、もう一方では、一瞬たりとも、僕本来の性格を捨てきれなかった。ボブが、そんな言葉もなしに、なあなあでこの状況をつづけていくこともまた、恐れていた。

僕がそんな自分の考えにとらわれていると、ボビーは僕を、そんな思い煩いの外に、軽々と連れ出した。

「ふー」

ボブは、腕の中の僕を落ち着かせるようにため息をついたあと、言った。

「いいじゃないか、このままで。僕は君を愛してるんだから。だって、君は、僕の妻なんだろ」

僕は、ボブの顔を見上げた。

そのまなざしの向こうには、まちがいなく愛があった。

「あたしも……愛してる」

僕はそうささやき、涙に震える唇を近づけていった。僕の……あたしの、夫に。

CopyRight (C) 2005 by StacyInLove

Based on the text FictionMania

Translated by Rino Maebashi

この「ワーキング・ガール」は、ステーシー・イン・ラ

ブさんのオンライン小説“Working Girl”を、前橋梨乃が翻訳したものです。原作著作権はステーシー・イン・ラブさんが、翻訳著作権は前橋が保持します。個人で楽しむ以外、無断でのコピーを禁止します。